

保土谷化学グループでは、企業価値のさらなる向上と非連続な成長を実現するべく、経営企画部とIT統括部が核となって関連部門と連携しつつ、全社横断の取り組みを着実に進めています。

研究開発におけるDX

研究開発のスピードアップや効率化の観点から、研究開発のデジタルトランスフォーメーション（DX）への取り組みは必須であると考えています。

当社では、計算化学を用いた材料設計や物性予測には既に取り組んでおり、いわゆるマテリアルズ・インフォマティクス（MI）を活用した開発の検討にも着手しました。若手の研究員を中心に、外部コンサルタントの協力も得ながら活動を進めています。

また、経営戦略や開発戦略の立案に対する知財情報の活用をさらに活性化するため、知財DXについても多角的な検討を開始しました。知財担当者の業務効率化にとどまらず、経営層や研究員にとっても効果的な体制の構築を目指していきます。

今後は、データベースの構築やAIの活用も推進し、データ駆動型研究開発の実現を図っていきます。

スマート工場実現に向けたデジタル基盤の構築

保土谷化学は、今後の製造DXを見据え、生産現場におけるデジタル基盤の構築に着手しました。

2035年のスマート工場実現を見据え、現在は「データ蓄積による見える化」を進める初期段階です。具体的には、国内主要拠点の連続プラントへPIMS（プラント情報管理システム）の一部導入を開始し、操業検証を進めています。あわせて、一部の回転体にセンサーを設置し、予知保全のトライアルにも着手しました。この実証を通じて次世代を担う現場の人材育成と意識改革を推進し、「経験と勘」頼みの操業からの脱却を図ります。

今後は連続プラントでの知見をバッチプラント群へ横展開し、設備の安定稼働と品質の均一化を通じて、中期経営計画「コード2030」で掲げる「稼ぐ力」の引き上げに貢献してまいります。

取り組みイメージ



関連するマテリアリティ

- 技術優位の維持
- 次世代の基盤技術の構築、新規事業の創出
- 高効率な生産体制の確立
- 製品の価値および信頼性の向上

IT基盤の強化と業務の変革

データ駆動型の経営ヘシフトするために、基幹系業務システム（ERP）の刷新に取り組み、一次対応が完了しました。システムの安定稼働を実現するとともに、業務プロセスの再設計（BPR）に取り組み、業務の標準化と効率化（Fit to Standard）を徹底し将来のアップデートにも備えました。データを利活用できる環境を整備したことで、データドリブンな意思決定カルチャーへの変革を目指していきます。

また、よりセキュアでスピーディなコミュニケーションが可能となるデジタル基盤を確立するために、次期ワークプレイスの導入を進めています。パソコン、ネットワーク、セキュリティを統合した日常業務を支えるデジタル上の土台を整備することで、業務の生産性向上とサイバーセキュリティ対策の強化を図る予定です。

さらに、蓄積された業務プロセス情報を基に、ECRS※のフレームワークを用いて業務のスリム化や重複の解消、簡素化を推進しています。並行して、中期経営計画が掲げる変革に向け、生成AIを活用した定型業務の自動化や資料作成の効率化と高度化を進めています。

これらの知見を安全な利用環境のもと全社へ浸透・定着させるため、セミナーや実践的なワークショップを定期的で開催し、知見を共有し共創する風土とITリテラシーの向上を図っています。

今後は、各部門に配置するDX推進者のリードのもと、役職員全員が当事者となって実用化に向けた検証と用途拡大を進めます。全社的な生産性の持続的な向上を達成し、組織全体のDXと企業価値の向上を強力に推し進めていきます。

※ECRS：Eliminate（排除）、Combine（結合）、Rearrange（再配置）、Simplify（簡素化）の頭文字をとった業務改善のフレームワーク。

